

京都大学	博士（ 法 学 ）	氏名	加 藤 哲 理
論文題目	ハンス-ゲオルグ・ガーダマーの政治思想		
(論文内容の要旨)			
本論文は、ドイツの哲学者ハンス - ゲオルグ・ガーダマーの政治思想の解明を目的としている。その主著『真理と方法』においてガーダマーが提唱した哲学的解釈学は、20世紀の人文科学を代表する思想潮流の一つとなっているのみならず、広く社会科学の全般にまで広く浸透しており、したがって政治思想ないしは現代政治理論の領域においても、その影響力は無視できないものとなっている。 しかし、政治思想の分野でも広範な影響を与え続けているにもかかわらず、ガーダマー本人の政治思想を対象として政治学研究者により書かれた研究は、国内外を見渡しても、皆無に等しい現状である。その根本的な原因として、政治学が対象とする事柄についてガーダマーがほとんど沈黙を貫いていることが考えられるが、本論文の意図するところは、このような沈黙の背後に隠されている彼自身の政治思想を明らかにし、また彼の主著である『真理と方法』を一つの政治思想の書として解釈することにある。 そのために本論文が依拠しているのが、アリストテレス的な実践の概念である。倫理学と政治学を一つの連続的な統一体として捉えるアリストテレス的な実践哲学の伝統を受け継ぐものとしてガーダマーの解釈学を位置づけることによって、実践の概念を入り口として、彼の政治思想に接近する。それが、本論文が選択した道筋である。そこで予備作業として、第一章において、主としてドイツ語圏を中心に1960年代以降に勃興した実践哲学の復権運動に焦点が当てられている。ここでは、その運動のなかで提唱されたアリストテレス的な実践＝政治概念の特徴が明らかにされ、さらにその運動へとガーダマーの哲学的解釈学を接続するという試みがなされている。 その成果を踏まえて、第二章以降において『真理と方法』の具体的な検討が行われる。この著作は三部構成であり、第一部が芸術、第二部が歴史、第三部が言語をそれぞれ主題としているが、本論文は、それぞれに一章を割り当て、三つの視角からガーダマーの政治思想を明らかにしようとしている。まず第二章では、善いものと美しいものをガーダマーが同義的に考えていることを手がかりにして、芸術作品についての彼の存在論を、実践＝政治の存在論として解釈し直すという作業が行われている。続けて第三章では、解釈学的な理解が実践の根本的な形式と見なされていることを端緒として、人間の遂行する理解についてのガーダマーの存在論的考察そのものを、政治思想的に読解することが追求されている。そして、第四章では、この理解が常に言語を媒介とするものであることを前提として、他者との終わりなき解釈学的対話のうちに、ガ			

ーダマーの政治思想の究極的な根源を探求することが試みられている。以上が本論文の第一部である。続いて第二部では、第一部の成果を踏まえて、現代政治理論の地平へとガーダマーの政治思想を位置づけることによって、彼の政治思想の輪郭がより具体的に描き出されることになる。

リベラリズムの普遍に対する、コミュニタリアニズムや多文化主義や差異の政治など特殊の側からの異議申し立てとして現代の政治理論の論争史を簡潔に図式化するならば、ガーダマーの解釈学は、それ自身の積極的な政治理論を提示するというよりは、普遍にも特殊にも積極的に与することなく、むしろ両者の間にあって双方に理論上の武器を提供してきたものと考えられる。それ故に、これまで解釈学は、独自の政治的な立場として理解されることは少なかったと言えよう。しかしながら、本論文は、そのような「間」としての地位にこそ解釈学的な政治理論の独創性があると理解する。第二部では、「間」にあることを積極的に評価するガーダマーの政治思想の特質を鮮明なものとするために、まずは彼がユルゲン・ハーバーマスやジャック・デリダと行った論争に着目し、それぞれを第五章、第六章で扱っている。理性の危機を前提としつつも、そこからコミュニケーション的合理性を救い出すことによって近代の普遍性になお依拠しながら自身の政治理論を展開するハーバーマスと、ニーチェ、ハイデガー以来の理性批判の衣鉢を継いで、特殊を圧殺する理性の普遍性を告発し、普遍と二元論的に対置されるような特殊を超えた差異への応答責任を原理としてポストモダン的な政治の在り方を模索するデリダを両極に配置することによって、「間」というガーダマーの政治思想の中間的地位が解明されている。加えて、ガーダマー自身が現代政治理論の論争に全く参与していないにもかかわらず、二人によって象徴される討議的民主主義や差異の政治と彼の政治思想との距離を測ることも可能となっている。

さらに第七章では、現代政治理論のうちでもとりわけガーダマーの思想と親和性があると見なされることが多いコミュニタリアニズムとの関係が取り扱われている。ここでは、サンデルやテイラーやマッキンタイアなどコミュニタリアニズムを代表する論者との直接的な比較によってではなく、ガーダマーと同じように「間」に位置している思想家として、ハンナ・アーレントとリチャード・ローティとの微妙な思想的偏差を探ることによって、ガーダマーの政治思想に内在するコミュニタリアニズムの要素と、にもかかわらず存在する両者の間の相違を明らかにすることが試みられている。

このようにして、第一部において実践哲学の復権という思想史的なコンテクスト、第二部において現代政治理論の地平という二つの角度から、ガーダマーの政治思想を解明したのが本論文となっている。簡潔にまとめるならば、ガーダマーにおいて政治とは、普遍と特殊の間にあって、その都度その両者を媒介するような終わりのなき解釈学的対話そのものなのである。

(論文審査の結果の要旨)

現代ドイツを代表する哲学者ガーダマーは、現実の政治的事象についても政治学についても積極的に発言することがなかった。にもかかわらず、今日の政治学において彼の所説はしばしば参照され、多くの政治学者によって重要な位置を与えられている。なぜなのか。本論文は、政治学者自身がこの問いに答えようとした野心的な試みである。

第一部において著者は、政治についての通念を越えたガーダマー独自の政治概念を抽出することに成功している。彼は、物質的欲望の追求にせよ普遍的正義の実現にせよ、人間の本質を想定し、それを根拠にして設定された目的を追求することが政治であるとは考えない。むしろ政治とは、その都度言葉を交換し合い、言葉の交換そのものによって共同体を確保しようとする企てである。それは、通常考えられているような目的の成就とは異質な存在の戯れであり、この戯れをとおして存在するものはその都度の姿を現れさせるのである。政治とは、意見が一致しないときに自らの立場の正当性を主張するためにウルティマ・ラチオを発動する通常政治とは異なり、意見の不一致を前提にしてその都度の合意をはかり共同性を確保する営みなのである。そしてガーダマーにとって重要なことは、戯れを可能にするこの言葉共同体は、常に既存のものとして人々に共有され、人々を包摂していると同時に、今はそれを共有していない異質な他者にも開かれていることである。したがって、人々のコミュニケーションを円滑なものにする彼の共同体は、閉じたものではなく、歴史のなかで他者に開かれ共同性を拡大していくのである。

著者は、ガーダマーの政治概念が現在の政治理論のなかで占めている位置を測定するために、第二部において代表的な政治理論家4名との比較を行っている。いずれも常識的な政治を越えて政治を捉え直そうとする点では共通しているが、この比較を通して明らかになるのは彼の政治概念の「間」としての性格である。彼は、普遍の立場にも特殊の立場にも与することなく、また保守と革新という分類にも分けられることなく、一貫して両項の「間」に位置することを自らに課している。この「間」としての性格こそが、彼の政治概念のなかに積極的な政治像を認めることを拒絶すると同時に、多様な政治概念によって援用される理由でもあると著者は指摘するが、卓見であろう。

以上、ガーダマーの難解な叙述のなかからその政治的含蓄を抽出し、他の政治理論家との比較を通してそれが現代政治理論に与えた画期的な意義を解明した本論文の価値は高く、十分に博士(法学)の学位に値すると認められる。

なお、平成22年2月10日に調査委員3名が口頭試問を行った結果、合格と認めた。